

親鸞さまの

【本文】

ふりようぶつち
不 了 仏 智 の し る し に は

しよち ぎわく
如 來 の 諸 智 を 疑 惑 し て

ざいふく ぜんぼん
罪 福 信 し 善 本 を

へんじ
た の め ば 辺 地 に と ま る な り

【意記】

阿彌陀様の智慧を抛り所としな
現れが次の如くです。

それは如来様の見方よりも自分様の
ものの見方を優先して 極楽がないと
思うこと等、

自らの力一つで善を積んでいけば
成仏できると思い、実践していく。

たもと

そのように阿彌陀様と 袂を分か
つて自分様を抛り所にする限り、
阿彌陀様の浄土 往生することはあ
りません。

【私の味わい】

かいぎさん

今回からは「誠疑讃」という 親鸞聖人の厳しいご指摘がなされる一段となてい
ます。阿彌陀様のご本願 必ず浄土 連れ往こう。この阿彌陀を抛り所になさいという
お心に背を向け 自分 能力と経験などを抛り所にして行くこと。これを「疑いと
して」ご指摘なさっています。

親鸞聖人は一定期間を関東でお過ごしになられ、そこで多くの方にご布教をされま
した。その結果、多くの方がお念仏を喜ばれるようになりました。しかし、親鸞聖人
がその後京都に帰洛されると、聖人の普段の教えに違うことを言い出す人が出て混乱
が生じます。その時に書かれたのが、お弟子の一人である唯円房の手による「歎異抄」
「聖人の教えと異なることを歎く書」です。

人は、自分なりの色眼鏡を少なからず持っています。それは、思い込みであたり
普段からの考え方や相対の好悪の情が物事の見方を左右します。そして、最大の色
眼鏡は自分を中心に考え、ここに重心を置いているということです。これは、他人はも
ちろんのこと、仏様に対しても同様に働きます。

先述の繰り返しになりますが、阿彌陀様はこの「阿彌陀を抛り所になさい」と仰て
います。それが「南無阿彌陀仏の「南無の意味であり、心です。私たちこの六文字のこ
とを人が素直に受け取れるかどうか、なお古今の問題であり続けています。（悠木